植草学園短期大学紀要　第20号　77 ～ 82頁（2019）

断食芸人はなぜ賞讃を拒んだのか？

― 人生の意味と幸福についての一考察 ―

壁谷　彰慶

Why Did Kafka's Hunger Artist Reject Admiration?

KABEYA Akiyoshi

フランツ・カフカの短編「断食芸人」の終幕で、断食を続ける芸人が、見世物小屋の監督に対し、自らの生き方は世間からの「感心」に値しないことを吐露するやりとりがある。彼が死に際に残したこの言葉は、読み手にいくつかの解釈の余地を残しており、その多義性は、「よい／悪い」や「幸福／不幸」などの価値に関わる倫理的概念について、哲学的な示唆を与えるように思われる。以下では、「断食芸人」の終幕から読み取れる「感心」の多義性を整理し、この作品が価値や「幸福」に関して示唆することを確認する。

キーワード：哲学、倫理学、幸福、人生の意味、価値

１ はじめに

フランツ・カフカの短編「断食芸人」の終幕で、断食を続ける芸人が、見世物小屋の監督に対し、自らの生き方は世間からの「感心（bewundern）」に値しないことを吐露するやりとりがある。死に際に発せられるこの言葉は、彼の表情が明記されないことと相まって、読み手に解釈を委ねており、鑑賞的価値を高めている。この多義性は、発言が字義通り意味することと、発言者が体現してきた所行が示唆することとの相違に端を発している。というのは、表面的には、「感心されてはならない」と発言するのは、多くの人が望ましくないと思う行為（「断食」）を追求することと、多くの人が、自分に望ましく思える行為をなした人に向ける評価的態度（「賞讃」）とが相容れないことを踏まえてのことであるように見えるが、それならば、彼がなぜ「感心されてはならない」ようなことを命を賭してまで続けるあり方は不可解なものに映るからである。作品内では、「食べたいものがなかったから」というのがその理由であるが、それだけで、果たして人は命を犠牲にするのだろうか。むしろ、彼が何も食べずに死に至ったのは、「食べないでいること」自体が彼の人生の目的――「幸福」――を構成していたからだと考えられないだろうか。するとさらに、最期に吐露した「感心されないでいる」ことも、彼の「幸福」を構成していたと考えることもできないだろうか。「食べないでいること」と、「感心されないでいること」とは、ともに、「多くの人が望ましく思うこと（食べる、感心される）の拒否」であり、また、この拒否は「多くの人なら望まないこと」であるという点で、同種に見えるからである。

このように考えると、「断食芸人」の結末は、「人生の意味」や「幸福」を考える哲学的考察にとって、非常に興味深い題材になると思われる。以下はこの見立てのもと、この作品の多義性を通して、「人生の意味」と「幸福」について考察してみたい。[1]

２「みんなは感心してはいけないんだ」

「断食芸人」で描かれているのは、一人の「芸人」が、断食を開始して死ぬまでの経過である。最後の一節を引用する。

> 「君はまだ断食をやっているのかね？」と監督はたずねた。「いったい、いつになったらやめるつもりだね？」
>
> 「どうか、ご勘弁願いたい」と、断食芸人はさ

植草学園短期大学　非常勤講師

さやくような声でいった。格子に耳をあてていた監督だけが、芸人の言うことがわかった。

「いいとも」と、監督はいって、指で額を指し示して、周りの係員たちに断食芸人のおつむの具合をほのめかした。

「許してやるともさ」

「いつも俺は、みんなが俺の断食に感心することを望んでいたんだ」と、断食芸人は言った。

「みんな、感心しているとも」と、監督は芸人の意を迎えるような調子で言った。

「でも、みんなは感心してはいけないんだ」と、断食芸人は言った。

「そうか、それなら感心しないよ」と、監督は言った。「でもなぜ感心してはいけないんだね？」

「俺は断食しないではいられなかっただけのことだから。ほかに仕様がなかったんだ」

「まあ、そういうなよ」と、監督は言った。「どうしてほかに仕様がなかったのだね？」

「つまり、俺は」と、断食芸人は言って、小さな頭を少しばかりもたげ、まるで接吻するように唇をとがらして、ひとことも聞き漏らされないように監督のすぐ耳もとでささやいた。「うまいと思う食べものを見つけることができなかったからだ。うまいと思うものを見つけていたら、きっと、こんな見世物なんかにならないで、きっとあんたやほかの人たちみたいに腹いっぱい食べていたことだろうさ」

これが最後の言葉だったが、まだ彼のかすんだ眼には、俺はもっと断食しつづけるぞ、という、もはや誇らしげではないにしろ断固とした信念の色が見えた。（カフカ（1998），pp. 192-194，一部改訳. 下線は筆者）

「断食芸人」が言い放つ「みんなは感心してはいけないんだ」との文句は、複数の解釈ができる。胸を締め付けられるような悲しい文句にも、周囲を侮蔑しているような文句にも受け取れる。この受け取り方の違いは、「幸福の主観的かつ外在的」という微妙なあり方についての一つの特徴をとらえているように思われる。

３「感心の拒否」の三つの解釈

末尾で断食芸人が言い放つ「でも、みんなは感心してはいけないんだ」との文句は、胸を締め付けられるような悲しい文句にも、周囲を侮蔑しているような文句にも受け取れる。少なくとも三つの解釈が可能である。

【解釈１】 警告

「感心＝共感」と考えて、「「みんな」が自分に「共感」して、自分と同じ生き方をしようとすれば、「みんな」は不幸になるし、生存もできなくなってしまう、だからやめなさい」という発言として理解する解釈。

「環境や運が悪いのだ（環境や運がよければ食べたのに）」

【解釈２】 賞讃の拒否１

「感心＝賞讃」と考えて「自分は、「みんな」がふつうに行っている「食べる」ということがこの世界では「できなかった」、人としての能力を欠如した欠陥品であって、賞讃に値する人間ではないのだ」という発言として受けとる解釈。自分の適切な評価を求める誠実さと、自分は賞讃されるどころか弱者であるという自覚のある人物（「誠実な弱者」）の発言としての解釈。

「自分には才能がないだけだ（才能があれば食べたのに）」

【解釈３】 賞讃の拒否２

「感心＝賞讃」と考えて、「自分は、「みんな」がふつうに行っている行為の背後にある、「みんな」が無自覚的に採用してしまっている「食べること＝よいこと」という価値観を＜あえて＞拒否しているのだから、優れた「超人」なのであって、「みんな」のような愚民の賞讃に堕してしまう人間ではないのだ」という発言として受けとる解釈。

「みんなの「よさ」は間違いだ」

これ以外の解釈もおそらく可能であろう。とはいえこの発言が少なくとも多義性をもつことを確認し、さらにそこから「幸福」に関する示唆を得るためには、この三つの解釈で十分である。以下では、

「食べること」の是非と「感心」の中身との二点からこれらの解釈を考察する。

４　［論点１］「食べること」の是非について

まず検討したいのは、「食べること」に対する是非である。【解釈１】と【解釈２】では、「食べること」は本当は「よい」ことだと断食芸人自身も思っており、その「よい」ことを実現していない現状に対する要因を、断食芸人自身がどのように理解しているのかにおいて異なっている。つまり、【解釈１】での断食芸人は、「食べること」は本当は「よい」と思っているが、自分はその「よいこと」を実現するための手段である世界中の食べ物のどれにも興味が＜たまたま＞なかったので、「食べない生き方をあえて選んだ」のであり、それは自分がたまたまそうした選択をした＜だけ＞のことだ、というように自分の現状をとらえている。彼は、「食べること」は「よい」のだが、自分はその「よいことをしなかっただけ」との自己理解をしており、ゆえに「「みんな」にはよいことをあえて選んでほしい」と考えている。また、「食べること」は、一つの生命としての人間の生存にも深くかかわっており、「食べないでいる」自分のあり方は、自分の身の危険にさらすことにもなる。それゆえ、このような自己理解を帰属された断食芸人に、「「みんな」は真似するな」という言葉を読者は読みとることになる。

【解釈２】の断食芸人も、同じく「食べること」は本当は「よい」と思っているが、自分はその「よいこと」を実現するための手段である世界中の食べ物のどれにも興味が＜いくら頑張ってももてなかった＞ので、何かを食べる生き方が「できず」、「食べない生き方を選ばざるをえなかった」のだ、というように自分の現状をとらえている。これは「食べること」は「よい」と認めた上での、自分はその「よいことができなかった（だけ）」、との自己理解であるから、「「みんな」にはよいことをしてほしい」と思っていることになる。また、それが「できなかった」のは、たまたまこの世界に彼の食べたいものがなかっただけであるのだから、運がよければ彼はこの世界でしっかり食べていただろう、ということにもなるだろう。それゆえ読者は、監督の言う「感心」を彼が拒否するくだりに、次の対比を読みとることになる。監督が「感心」するのは、「断食という、いつも何かを食べたがっている「みんな」には真似できない偉業を断食芸人がやり遂げることが＜できた＞」と思ったからであり、当の断食芸人自身は、むしろ、「「みんな」が当たり前にできている「世界のなかのいろいろな食べ物を食べる」行為が自分には＜できなかった＞」と思っている、という対比である。それゆえこの読み筋に立つ読者は、そうした自己理解を帰属した断食芸人に、「自分は感心されるどころか弱者である」という自覚に基づく謙遜と、自分の適切な評価を「監督」や「みんな」に求める誠実さを読みとることになる。

以上の二つと異なり、【解釈３】では、そもそも「食べること」を「よい」と断食芸人自身は考えていないことになる。彼の生き方は、「食べること＝よいこと」という価値観を＜あえて＞拒否するものになる。彼の特徴は、この世界に自分の食べたいものがない、という【解釈１】と【解釈２】の断食芸人が直面したのと同じ事実から、次の洞察を得ている点にある。「みんな」は「食べる」ことを「よい」と思っているが、「よい」からそれを「食べる」のではなく、むしろ、世界のなかの食べ物を食べざるをえない＜だけ＞なのだ、という洞察である。彼が至るこの境地では、【解釈２】の＜できる／できない＞の中身と陣営が逆転している。【解釈２】での対立は、「世界のなかの食べ物を食べること」を、＜「みんな」はできる／断食芸人はできない＞、という対比であった。他方で、【解釈３】での対立は、「世界のなかの食べ物を食べないでいること」を、＜「みんな」はできない／断食芸人はできる＞、という対比になっている。彼が得ている自己理解は、自分は「みんな」ができないことをなす優れた能力をもっているのだ、というものである。それゆえ、この自己理解を帰属された断食芸人には、自分は優れた「超人」なのであり、ゆえに「みんな」のような愚民にやすやすと「感心」されてしまうような人間ではないのだ」といった、「みんな」への愚弄や軽蔑の姿勢をわれわれは読みとることになる。

５　［論点２］「感心」の中身について

もう一つ検討したいのは、「感心」の中身である。「感心」とは、「よいことをしているからすばらしい

人だ」という仕方で誰かを肯定的に評価することだが、それぞれの解釈で、「感心されてはいけなかった」と言うさいに断食芸人が念頭に置いている「よいこと」が異なるように思われる。

そこであらためて、「監督」が断食芸人に言葉を投げかけるとき想定している「みんな」が、なぜ彼に「感心」するのかを確認しておきたい。「みんな」が彼に「感心」するのは、自分たちには＜真似できない＞芸当を断食芸人が行うからである。彼ら・彼女らが断食芸人に向ける「感心」の言葉（賛辞）は、口語に直せば「私たちが＜できない＞ことを＜できる＞なんて彼はすごいね（よいね）！」といったものになろう。断食芸人は、つまるところ「みんな」にとって自分たちが＜できない＞ことを成し遂げた「超人」として評価されていることになる。但しそれは、何らかの「よい」ことをしてくれた人たち――河川で溺れている子どもを命がけで救出したり、瀕死の患者を長時間の手術によって回復させたり、世界中の人の便益を高める発明をしたりする「偉人」たち――に対して私たちが投げかける「感心」と、質を異にしている。そうした人たちに私たちが向ける賛辞は、もちろん私たちが＜真似できない＞芸当を彼らが成し遂げたからではあるものの、さらにそこには、「よい」ことをしてくれたという側面が伴われているはずである。私たちが＜真似できない＞「よい」ことをしてくれたからこそ、彼らは「感心」されるのである。対して、断食芸人の場合は、彼が成し遂げたことの「よさ」は、重視されていない。もっぱら断食芸人が「感心」されるのは、「みんな」が＜できない＞ことを彼は＜できる＞から、だけである。

このことには、さらに説明が必要だろう。つまり、「みんな」は、彼が成し遂げた「断食」を、人命救助や有益な発明のような「よい」こととは見なしていないとする論拠の説明である。とはいえ、「みんな」が「断食」をどう見ているかは、状況描写から推察可能なことである。彼が断食芸人として檻に入れられ、「見世物」として「みんな」の好奇のまなざしにさらされていたという事実は、「食べない」ことをほとんどの人は試みようとせず、また、「食べない」からといって世間の人々が好待遇をしてくれるわけではない――表彰や昇給の恩恵にあずかるわけでもなく、彼は檻に閉じ込められている――ことを暗示している。ここから、「みんな」は、断食をそれ自体として決して「よい」ものとは思っていない――自分たちは真似できない以前に、真似しようとしたがることすらない――ことが推測される。よって、「みんな」が「感心」するのは、断食が「よい」からではなく、むしろ「よくない」（消極的に「悪い」）と思えることを断食芸人が＜できる＞からだけに発していると考えてよいだろう。

では次に、断食芸人自身――「感心されてはいけなかったのだ」と発言する当の人物――は、「食べること」についてどう評価しているのかを、解釈ごとに考えてみよう。【解釈１】と【解釈２】では、断食芸人は「食べること」に対する是非において、「みんな」と同じ評価をしている点では一致していた。どちらの断食芸人も、「食べること」は本当は「よい」ことであり、自分の「食べない」あり方は本当は「悪い」とも思っていながら、その「よい」ことを実現していない現状――「悪い」ことを実現してしまっている現状――に対する要因について、断食芸人自身がどのように理解しているのかにおいて異なっていた。自分は「感心・賞讃」に値しないことの要因を、「運」という外的要因ととらえるのが【解釈１】の「警告」する断食芸人であり、「能力不足」・「欠陥」という、自分の内的要因（自分の非）ととらえるのが【解釈２】の「誠実な評価を求める弱者」の姿の断食芸人である。どちらも、「みんな」と＜同じ＞価値基準を共有しており、それを評価軸として受け入れている。それゆえ【解釈１】の態度には、「食べないこと（断食）は悪い」という「みんな」と同様の価値観を読みとれる。そして、「感心」することによって、自分がたまたまそうしてしまっているだけで自分も「悪い」と思っている断食を、自分の努力の成果と誤解されて、そうした努力に魅了される人たちによって真似されるのはよくない、という態度をうかがうことができる。自分自身も「悪い」と思っていることを、自分がたまたま置かれた境遇を誤解する人たちにさせてしまうのは、自分の本意ではないからである。（とはいえ、前段落で述べたように、「みんな」が断食芸人を檻に入れて見世物にしている以上は、じっさいに彼らが断食芸人に魅了されて「食べないこと（断

食）はよいのだ」と思うことはないだろう。）また、【解釈２】の態度には、「みんな」に「感心」されたいと自分も思っているがその感心には自分は値しない、という「謙遜」の態度もうかがえた。この点で彼は「感心」を受けること自体の「よさ」も受け入れており、それをじつは望んでいる、「みんな」と同じ、きわめて人間的な存在である。

対して、【解釈３】の断食芸人の目標は、「食べる＝よい」＆「食べない＝悪い」、という「みんな」の価値観から離れ、それを転倒させること――「食べる＝悪い」＆「食べない＝よい」という価値観の採用――にあり、彼が依拠する価値基準は、「みんな」と異なっている。さらに彼の場合、「みんな」と異なる価値基準の採用は、【解釈１】と【解釈２】のときのように、「感心してはいけないんだ」という発言によって何か（「警告」や「謙遜」）を表明するさいの前提になっているのではなく、その発言で表明される事柄自体になっている。というのも、「感心してはいけないんだ」と【解釈３】の断食芸人が言うとき、この発言は、「みんな」が採用している価値基準を放棄し、自分は独自の価値基準を採用して生きることの態度表明になっているからである。彼はここで、「みんな」が採用している価値基準を放棄し独自の価値基準を採用して生きようとしてきた自分の決意を再認し、この先の自分を鼓舞しているのである。たとえ「みんな」から、本節冒頭で確認したような、「自分たちには真似＜できない＞ことを、彼は＜できる＞からすごい（よい）」という意味での「感心」を受けるとしても、それはこの断食芸人にとっては不当な対応である。彼が望んでいるのは、「みんな」が採用する価値観（「断食＝悪い」という価値観）に対して拒否をする独自の能力の発揮――「みんな」が「悪い」と評価するものを「よい」と評価できること――にあり、「みんな」が「よい／悪い」を語るさいに依拠している価値観自体の転覆や瓦解こそが目論まれている。そのことは、「みんな」の価値観のもとから離れることであり、それゆえ、彼にとってこの評価軸の転倒がもつ「よさ」は、「みんな」にわかられることがあってはならないものである。

おそらくさらに彼は、この価値観の転覆や瓦解の能力を指す「できる」自体に対しても、独自の解釈を与えるだろう。つまり、「自分たちに真似＜できない＞ことが＜できる＞からすごい（よい）」、という先の「感心」を支える価値観を自分の転覆能力にあてがうことすらも拒否し、さらに転覆や瓦解を目指すことになるだろう。以上で考察した断食芸人は、自身の能力をここでも発揮し、「＜できる＞＝よい」＆「＜できない＞＝悪い」という、「能力」に対する評価一般を支える価値観を拒否するはずだからである。ましてや彼は、「賞讃をされること＝よい」という価値観からして拒むのだから、「感心」を受け入れることなどないだろう。

これが意味するのは、彼が自身が誇る能力を発揮し続ける限り、「みんな」に真似＜できない＞ことが＜できる＞というその能力への「感心（賞賛）」は、彼の望むかたちで「みんな」から与えられないということでもある。なぜなら彼の能力は、「みんな」の「よい／悪い」に関するあらゆる価値観の転覆や瓦解に波及し、彼の望む「感心」は、「みんな」が提供しうるそれと相違し続けるからであり、また、彼の能力の発揮は、価値観の転覆や瓦解の過程のなかで顕現しており、それが＜できる＞ことの「よさ（すごさ）」は、「みんな」からは計り知れない、彼のみが真意を知る次元において理解可能になるからである。（断食芸人と同等のことを行う人がいたら、かなりの深度で共感したり賛辞を贈り合えたりできるかもしれないが。）たとえ彼がその能力を「みんな」に賞賛してほしくとも、元来それは無理なのである。

いずれにしても、【解釈３】の断食芸人は、「みんな」が「悪い」（「よくない」）と思えていることを「よい」と思えることや、彼らが「よい」と思うことを「悪い」と思えること――「みんな」の価値を拒否し、自身の価値に依拠できること――において、自身の「よさ」（「すごさ」や「超人性」）を誇っている。三つの解釈と、二つの論点について整理すると、次のようになる。

	論点 1:「食べる」の是非 断食芸人の評価 〔「みんな」の評価〕		論点 2:「感心」の中身」 断食芸人の側での 「みんな」からの「感心」の理解 *【「感心してはいけないんだ」の機能】*
	食べることは	食べないことは	
【解釈 1】	よい〔よい〕	悪い〔悪い〕	「悪い」ことへの共感 *【警告】*
【解釈 2】	よい〔よい〕	悪い〔悪い〕	「みんな」が＜できない＞ことを ＜できる＞ことへの賞讃 自分には受ける資格がない *【謙遜】*
【解釈 3】	悪い〔よい〕	よい〔悪い〕	「みんな」が＜できない＞ことを ＜できる＞ことへの賞讃 誤解だし、されたくない *【拒否】*

6　結語

最後に「幸福」について考えてみたい。【解釈３】の断食芸人は、だいぶ非人間的なあり方をしている。「幸福／不幸」という点から考えれば、【解釈２】の断食芸人は、「みんな」からは「不幸に見える」だけなのに対し、【解釈３】の断食芸人は、「不幸であることに幸福を見ていた」ことになる。もしも彼が、「断食芸人」であることを許されず、口に食べ物を捻じ込まれ自動的に咀嚼をする機械に縛り付けられたり、栄養剤を点滴されたりしても、彼はそれを拒否するだろう。彼にとっては、「他人から見た不幸」が、「自分にとって幸福」である、という捻れた関係が発生している。

とくに、【解釈３】の断食芸人が、他人の価値評価と独立に自分の評価軸――勝ち負けをつける「土俵」――を設定していることは、重要な示唆を与えているように思われる。勝ち負けの評価軸を自分で設定し、自分だけが勝つ、つまり、自分だけが誰にもわからない仕方で「幸福」になるような状態をつくることが、断食芸人だけでなく、個々人にも備わっていることが示されているように思われるからである。カフカの意図はわかりかねるが、こうした「幸福」や「よい／悪い」の評価軸は、一見するとある程度の安定性をもって客観的に存在しているように見えながら、個々人が簡単に転覆できるほど脆いものであることを、「断食芸人」という作品は示しているように思われる。[2]

文献

青山拓央（2016），『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』，筑摩書房.

カフカ, F.（1998），「断食芸人」，池内紀編訳，『カフカ寓話集』，岩波文庫，178-195.

柏端達也（2011），「幸福の形式」，『応用哲学を学ぶ人のために』，71-83.

川谷茂樹（2012），「＜人生＞がゲームであるという可能性について」，北海学園大学学園論集 151，1-23.

Suits, B.（1966），Is Life a Game We Are Playing?，*Ethics* 77，209-213.

注釈

1　本稿は、他学にて筆者が担当している講義（「哲学」）にて、2017年度と2018年度に使用した配付資料を加筆修正し論文化したものである。当該授業では、青山(2016)と柏端(2011)を中心に「人生の意味」や「幸福」を主題（の一つ）にしており、本稿の内容は、主観説と客観説の対立を検討する文脈で扱われた。論文化にあたり、授業後に学生から受けたコメントも反映されている。彼女ら・彼ら、及び、今回の寄稿に関して寛大な対応をして頂いた植草学園短期大学に謝意を表しておきたい。

2　この先の考察は、川谷(2012)がSuits(1966)の議論をもとに発展させた「人生＝ゲーム」という発想との連関で論じてみたい。川谷は、「人生」を、「死」を目的とし、「自殺の禁止」を構成的ルールとするゲームであるとしながら、そのなかでなされる活動には、他のプレイヤーとの勝敗を競うことを目的とした、目的地ありきの（キーネーシス的な）活動と、ほかのプレイヤーが存在しない、絶対的で、活動自体が意義をもつ（エネルゲイア的な）活動との、二重性があることを指摘している(pp. 14-15)。後者の活動は、【解釈3】の断食芸人のあり方に結びつくと考える。